

# 地域子育てセンター「ゆりかもめ」の歴史 1

## ～ 社会館保育園が地域子育て支援事業を開始 ～



### 1-1 地域子育て支援センター「ゆりかもめ」発足

1995（平成7）年、木更津市からの委託事業として、社会館地域子育てセンター「ゆりかもめ」が発足した。県下で4番目、県南部では最初の企画であった。

当時、15年後の今日の「ゆりかもめ」の姿を予測した者は、社会館保育園内部には私を含めて、1人もいなかった。実際、副園長以下、社会館職員がその意義を納得するのに3年程の月日を必要とした。「ゆりかもめ」主任三橋京子は、園長と委託事業の最終責任者である市役所児童家庭課、その当時の課長服部善郎氏（現副市長）の指導と励みだけを頼りに頑張った、と言って言いすぎでないくらいに孤立無援であった。

たまたま、「ゆりかもめ」指導員の募集に応じて採用された平野ひろみ指導員（現木一小学童保育所主任指導員）が、「ゆりかもめ」副主任格で三橋を補佐してくれていた。この方は自ら小さな託児所を経営したことがあった。責任感と実行力に打ち満ちたアイデアマンであった。私も三橋も、立ち往生すると、平野指導員の意見を求め、検討の結果を三橋が服部課長に打診に伺った。平野先生のご提案は、しばしば秀逸であり、服部課長の反応は常に変わらず私たちを勇気づけてくれるものであった。

発足に先立つこと2年前、1993（平成5）年、厚生省の提案「保育所が地域の母子のために、育児のノウハウを提供し、出来るサービスを工夫して欲しい。」を、社会館園長が受け容れて1棟の専用施設の新築を決めた所からことは始まる。木更津市は、千葉県南部で最初のこの企画を認めてくれて、建物建設費の一部を補助した上で、社会福祉法人木更津大正会へ事業委託すべく、年間の

運営費として800万円を国県と共にその新年度予算に計上してくれた。時代を先取りした、木更津地域4市では前例がない決断であった。

## 1-2 オモチャ館構想から地域子育て支援センター「ゆりかもめ」へ飛躍

今となっては当たり前になってしまった、地域子育て支援センター「ゆりかもめ」。その15年の歴史を、先ず、施設の拡充整備の面から見ていこう。

1993（平成5）年9月

1988（昭和63）年2月挙行された、社会館創立50周年記念事業から5年が経った。社会館保育園オモチャ館構想を私は思いついた。既に、スイス・スウェーデン・西ドイツ・フィンランド等の木製のオモチャ等を50万円分用意してあった。が、保育所園児のためには、その供用管理に自信を持たずなかなか使えない。「そうだ、オモチャ遊び専用の建物を造ろう。建物も、子供達が突然興奮してしまうような構造にしよう。」



松田設計事務所との設計打ち合わせを開始して間もなく、私は「地域子育て支援センター事業」を、本年度より厚生省が開始している【偶然その1】ことを知り、建設目的を変更。地域に開かれた、地域子育て支援センター「ゆりかもめ」の用に供することに決定する。赤ちゃん同伴のトイレや、公衆電話の設置、充分な下駄箱の用意など、設計を更に充実させて、親子での集団利用に備えた構造にした。もちろん「オモチャ館」としての機能も持たせた。

## 1-3 南房総最初の地域子育て支援センター「ゆりかもめ」建設、開所



1993（平成5）年11月

私は「ゆりかもめ」の建物建設費補助金を国に申請しようとしたが、いまだそのような補助制度はなく（1995（平成7）年度より国庫補助がついた）、県児童家庭課が間に入って、（財）中央競馬馬主社会福祉財団に対し、その補助金を獲得すべく働きかけてくれた。それまで同財団は、地域子育て支援センター事業の用に供する建物の建設を補助対象にしていなかった。が、驚いたことに、年度途中でその補助要項を改正し【偶然その2】、地域子育て支援センターの建設を補助対象に含める措置をとってくれた。全国で3件の該当があり、「ゆりかもめ」はその1件となったと聞く。実に有り難く幸運なことであった。かくして、中央競馬財団から補助金1200万円、木更津市から112万円の補助金をいただき、更に県社協から500万円を借り入れ自己資金を加えて2400万円で、木造2階建ての瀟洒（しょうしゃ）で不思議な建物1棟の建設を始めた。

1994（平成6）年11月 ゆりかもめ本館建設工事着工

1995（平成7）年3月 ゆりかもめ本館建設工事竣工

1995（平成7）年4月 木更津社会館保育園地域子育てセンター「ゆりかもめ」創設

1995（平成7）年5月 落成・開所式

1996（平成8）年9月 同本館1階に「ゆりかもめ」一時保育所「カモメ組」開設

「安らぎの宇宙空間」としてしつらえられていた「ゆりかもめ」1階、100万円もする移動書架さえ備えられていた場所が、一時保育所として改造された。高殿のようなデッキが付けられて、更にイメージを洗練させた「ゆりかもめ」本館。定員10名が、常にオーバーするようになるのに時間はかからなかった。